

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成30年 6月19日現在

機関番号：32687

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2017

課題番号：15K13190

研究課題名(和文)「障害児のための家庭教育」をめぐる思想史研究

研究課題名(英文)A history of thought on home education for children with disabilities

研究代表者

志村 聡子 (SHIMURA, Akiko)

立正大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：50406609

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、三田谷治療教育院(兵庫県芦屋市)を設立した三田谷啓(1881-1962)に着目した。三田谷は、主に関西地方の各地において「母の会」の組織化を促していた。最初に発足したのが「大阪母の会」と「甲陽母の会」で、これらは、三田谷が大阪市と兵庫県武庫郡精道村の2か所に相談事業の拠点を持っていたことと関係していた。「母の会」組織化の目的の一つは、三田谷が手掛ける諸事業の意義を啓蒙することであったとわかった。

研究成果の概要(英文)：This study examines the work of Hiraku Sandaya (1881-1962), founder of the Sandaya Therapeutic Education Center in Ashiya, Hyogo Prefecture. Sandaya promoted the organization of Mothers' Associations, primarily in the Kansai region. The first such groups to form were the Osaka and Koyo Mothers' Associations, in part because Sandaya operated child welfare centers in the city of Osaka and the town of Seido in the Muko District of Hyogo Prefecture. This research reveals that one of Sandaya's goals in organizing Mothers' Associations was to raise awareness of the significance of various other initiatives he was involved in.

研究分野：教育史

キーワード：三田谷啓 母の会 相談事業 三田谷治療教育院 大阪母の会 甲陽母の会

1. 研究開始当初の背景

1920～30年代の日本で「家庭教育の振興」を掲げて母親の養育責任が唱えられ、母親への接近が図られたことが知られている。日本教育史研究における家庭教育をテーマとした先行研究は、家庭教育に責を負う立場として女性が見出されたことを明らかにしてきた(小山静子『良妻賢母という規範』1991年、山本敏子「明治期における 家庭教育意識の展開」1992年、牟田和恵『戦略としての家族』1996年、広田照幸『日本人のしつけは衰退したか』1999年、志村聡子『一九三〇年代日本における家庭教育振興の思想』2012年、沢山美果子『近代家族と子育て』2013年、など)。また、家庭教育をうたいながら女性を銃後支援に動員したことも明らかになっている(干野陽一『近代日本婦人教育史』1979年、奥村典子『動員される母親たち』2014年、など)。

一方、同じく1920～30年代は、一部の学校・施設において、障害児教育の取り組みが模索されつつあったことも明らかになっている。しかし、教育主体としては教師や保姆が前提とされ、親の教育営為の検討は手つかずとなっている(戸崎敬子『特別学級史研究』1993年、高橋智・清水寛『城戸幡太郎と日本の障害者教育科学』1998年、山田明『戦前知的障害者施設の経営と実践の研究』2009年、河合隆平『総力戦体制と障害児保育論の形成』2011年、高野聡子『川田貞次郎の「教育的治療学」の体系化とその教育的・保護的性格に関する研究』2014年、など)。

障害児の養育環境としての母親も見出された時期でもあったと考えられるが、「家庭教育」と「障害児教育」の両分野をつなぐ「障害児のための家庭教育」についての研究は手つかずとなっている。つまり、家庭教育史と障害児教育史の分野は、交わることなく別々に展開されてきた。報告者による研究成果(上記下線にて示した)も、「障害児のための家庭教育」について論じるまでに至らず、この点が大きな課題として残っていた。

そこで本研究では、両分野において著名な三田谷啓(1882 - 1962、三田谷治療教育院を設立)に焦点をあてることとした。彼が障害児を育てる母親たちに向けて発信した「障害児のための家庭教育論」を明らかにし、「障害児のための家庭教育」をめぐる思想史研究に先鞭をつけようと考えた。

三田谷は、「母の会」の組織化を通して母親への教育を試みた一方、三田谷治療教育院を設立して障害のある子どもを支援したことが明らかになっている人物で、まさに両分野に関係している。しかし、三田谷研究もまた、二つのテーマに分断されてそれぞれに展開されてきた感がある。三田谷が障害児を育てる母親にどんな理想を描いたのかなど、その「障害児のための家庭教育論」は明らかにされてこなかった。

三田谷の母親教育論を取り上げた先行研究(村田恵子「三田谷啓における母親教育の構想」1997年、首藤美香子『近代的育児観への転換 啓蒙家三田谷啓と1920年代』2004年、など)では、三田谷が母親たちに向けて行った障害児教育に関する指導部分は明らかになっておらず、課題が残されていた。

2. 研究の目的

三田谷の論稿(障害児を育てる家庭環境や親の役割などについて論じたもの)から、三田谷の「障害児のための家庭教育論」を明らかにすることとした。

また、当時は障害児を施設に収容して支援を行う形がわずかにとられるようにもなり、親と子どもの分離に伴う問題も自覚化されつつあったものと考えられた。そこで、施設収容をめぐる、親の役割がどのように構築されたかについてもとらえたいと考えた。

3. 研究の方法

三田谷啓による論稿(単行本・雑誌掲載論文)を収集した(1900年～1945年を中心に)、あわせて、三田谷が関係した組織(日本児童学会、大阪市立児童相談所、日本児童協会、三田谷治療教育院など)に関する論稿を収集した。主な雑誌は、『児童研究』(日本児童学会発行)、『日本児童協会時報』、『育児雑誌』、『母と子』(いずれも日本児童協会発行)で、当該資料所蔵図書館で閲覧の上資料を複写した。そのほか、三田谷治療教育院において所蔵されている母親教育・「母の会」関係資料、雑誌『児童相談』を閲覧複写した。収集した論稿は、整理の上読み進めて分析し、三田谷が障害児を育てる親に向けて発信した言説を見出すものとした。

上記の作業の前提となるが、三田谷や三田谷治療教育院、大阪市における児童保護事業に関する先行研究を収集し、現時点での到達地点や課題を把握した。

4. 研究成果

(1) 先行研究について

三田谷に関係する先行研究を収集したので列挙する(先述した2稿はのぞく)。岡田英己子・津曲裕次「ドイツ Heilpädagogik 研究の我国への導入過程について」1985年 津曲裕次・迫ゆかり「三田谷啓」1988年 柴崎正行「『愛育の書』改題」1988年 庄司完「三田谷啓の治療教育の研究() 「治療教育」の内容の検討」1991年 戸崎敬子「大阪市立児童相談所と付設「学園」の成立と展開」1992年 本保恭子「三田谷啓と治療教育学」1993年 村田恵子「三田谷啓執筆論稿について 雑誌『児童研究』『育児雑誌』の分析」1996年

駒松仁子・津曲裕次「三田谷啓著作目録(1) 1908(M.41年)~1921(T.10)」1997年
 駒松仁子「昭和初期の一虚弱児施設、三田谷治療教育院の“治療教育”について」1998年
 津曲裕次・駒松仁子「三田谷啓著作目録(2)」2000年
 駒松仁子『シリーズ福祉に生きる40 三田谷啓』2001年
 駒松仁子「三田谷啓の阪神児童相談所の活動 大正12年~大正15年の相談実績から」2002年
 河合隆平・高橋智「戦間期の児童保護事業と総力戦体制下の母子愛育事業の歴史的位相 三田谷啓の児童相談・育児啓蒙活動を事例に」2006年
 鈴木朋子・岡村宏美・木下利彦「三田谷啓によるピネ式知能検査の改訂」2009年
 本保恭子「三田谷啓と日本児童学会 三田谷の講演活動を中心に」2011年
 小野尚香「近代日本における児童相談の保健、福祉、教育的機能の一例 三田谷啓「児童相談の現状と将来」から」2012年
 津曲裕次・駒松仁子「三田谷啓著作集 解説」2015年
 菊池義昭「解説『子供の世紀』の創刊の社会的背景を考える 大阪児童学会での三田谷啓の活動などを通して」2015年
 津曲裕次「三田谷啓の生涯と三田谷治療教育院の九〇年」2018年

先行研究を収集して分析した結果、三田谷が行った「母の会」の組織化については、ほとんど明らかにされてきていないことがわかった。

(2) 研究の主な成果

三田谷が促した「母の会」の組織化

資料を収集して分析するうち、三田谷は各地に「母の会」の組織化を促しており、その動きはかなり顕著なものであったことがわかった。そこで、「母の会」の動向についてみていくこととした。

駒松仁子(2001)は、前掲『シリーズ福祉に生きる40 三田谷啓』において、三田谷に関係した「母の会」が39に達したと述べている(125頁)。三田谷に関係した「母の会」の動向を明らかにした点は特筆すべきであるものの、活動の具体的な内容まではとらえていなかった(39の内訳は未記載)。報告者は、日本児童協会(三田谷が主宰)発行『母と子』に記事の記載があった「母の会」(1929年~1943年)を調べた。その登場回数を問わず抽出したのが以下の通り。

大阪母の会、甲陽母の会、(中山文化研究所)
 神戸母の会、京都母心会、京都母の会、
 阪南母の会、明石母の会、嵯峨母の会、相生母の会、堺母の会、(母のための研究会)
 名古屋母の会、奈良母の会、大阪翠会、高田母の会、田園調布母の会、呉母の会、松山母の会、洗足母の会、豊中母の会、塚口母の会、十三母の会、貝塚母の会、広島母の会、堺翠

会、尼ヶ崎母の会、久万母の会、菅南母姉会、奈良母姉会、播磨母の会、ラムバス母の会、北千束母の会、下北沢母の会、湖東母の会、海南母の会、池田母の会、熊本母の会、久宝母の会、灘母の会、西灘母の会、八幡母の会、尾道母の会、福岡母の会、唐津母の会

()を含め45組織、()をのぞくと43組織となった。ただし、1回のみ掲載も多数あったため、すべてに組織化の実態があったかどうかは不明である。駒松による39組織との認識と異なるが、大きく認識を違えるものでもない。関西地方を中心に、確かに三田谷を中心に「母の会」の組織化が活発であったとわかった。

「母の会」会員の居住地

三田谷治療教育院所蔵『日本母の会々員名簿』(1933年発行)には、8つの「母の会」の会員名簿が記載されていた。「甲陽母の会」(兵庫県武庫郡)、「阪南母の会」(大阪市住吉区)、「播磨母の会」(兵庫県赤穂郡)、「奈良母の会」(奈良市)、「堺母の会」(堺市)、「高田母の会」(奈良県北葛城郡)、「神戸母の会」(神戸市)、「呉母の会」(呉市)である(かっこ内は会の事務所のある自治体)。同名簿とあわせ、『昭和九年九月現在 大阪母の会々員名簿』(大阪市)が同院に保管されている。両名簿から明らかになったことをまとめる。

名簿に掲載されている各母の会の人数

甲陽母の会	131名	播磨母の会	64名
奈良母の会	61名	堺母の会	143名
阪南母の会	179名	高田母の会	83名
神戸母の会	46名	呉母の会	135名
大阪母の会	95名		

名簿からとらえる会員の居住地

甲陽母の会
 武庫郡精道村 52名、武庫郡御影町 8名、
 武庫郡鳴尾村 7名、武庫郡瓦木村 1名、
 武庫郡本庄村 2名、武庫郡本山村 11名、
 武庫郡住吉村 2名、武庫郡魚崎町 1名、
 武庫郡大庄村 1名(以上武庫郡85名)
 西宮市 42名、神戸市 1名、大阪市 1名、
 明石郡 1名、川辺郡 1名

以上、「甲陽母の会」会員は、兵庫県武庫郡精道村と西宮市の在住者(三田谷治療教育院は精道村と西宮市の境に位置)を中心に構成されていたとわかった。

大阪母の会

大阪市 東区16名、住吉区9名、
 天王寺区7名、西区6名、南区6名、
 北区6名、此花区5名、西成区4名、
 港区4名、西淀川区3名、大正区1名、
 東成区1名、(大阪市計73名)
 大阪府10名、兵庫県6名、西宮市2名、
 阪急沿線4名

以上、「大阪母の会」会員は東区（三田谷治療教育院(のちに分院)の所在地が東区今橋)居住者が比較的多いものの、大阪市内を中心に広く分布していたとわかった。

阪南母の会

大阪市住吉区 149 名
(うち、住吉区住吉町 123 名)
大阪市西成区 17 名、大阪府泉北郡 5 名、
大阪市天王寺区 3 名、
大阪市南区 2 名、大阪府南河内郡 1 名、
大阪市浪速区 1 名、堺市 1 名

以上、「阪南母の会」会員は、大阪市住吉区住吉町の在住者を中心に構成されていたとわかった。

上記 3 つの「母の会」居住地の傾向から、各会会員の居住地は限定されていたと言えるものの、その範囲は会によって異なることがわかった。

「甲陽母の会」「大阪母の会」存立の背景

三田谷は、1923(大正12)年7月、兵庫県武庫郡精道村の村役場2階に阪神児童相談所を設立し、同年10月には大阪市南区三休橋南詰東へ入りに大阪出張所を開設した。この段階から、三田谷は2つの活動拠点を持っていた。1927(昭和2)年2月、三田谷は大阪市東区今橋に三田谷治療教育院を開設した(大阪出張所が発展)。同年2月から月に1回、主に三田谷治療教育院講堂で「母の会」が実施された(『児童相談』5巻3号~6巻4号、掲載回数13回)。報告記事では、同年11月21日の会で「母の会の幹事が定まりました。それは里見しづ、小田やえ、和田たけ子、新田倭文子、松浦敏子の方々です。」と書かれ、「久米屋寿子さんは相談役として尽力してくださいませ。」とされていた。「会員の希望されるやうにこの会は家庭的で一種言ひ知れぬ親しみのある団体にしたいと思ひます。」とあり、三田谷が女性たちの会を担う姿勢を大切にしようとしたことがうかがえた(『児童相談』5巻12号)。

1927(昭和2)年8月、兵庫県武庫郡精道村打出に収容施設「コドモの学園」が完成し、こちらが三田谷治療教育院の本院となり(阪神児童相談所を吸収)、大阪市東区今橋の三田谷治療教育院は分院の位置づけとなった。このように、三田谷は、大阪市下と精道村に2つの活動拠点を持続させていた。

その後、「母の会」の位置づけに変化が見られた。1928(昭和3)年5月発行『児童相談』6巻5号で、「母の会」の予告記事が掲載された折、「会場」として「今回は武庫郡精道村打出、三田谷治療教育院講堂で開きます」と書かれていた(日時は5月17日午後2時開会)。これについては、翌号の『児童相談』6巻6号で、「講演日誌」として「五月十七日 三田谷治療教育院母の会」の記載があった。『児童相談』同号の予告記事では、「甲陽母の会」として、「六月二十一日午後

一時半、精道村打出、三田谷治療教育院講堂にて開会」と記載がされ、初めて「甲陽母の会」の名称が登場した。同じく同号では、「大阪母の会」の予告記事も掲載され、「六月二十二日午後正二時、大阪北区堂ビル中山文化研究所にて」と記された。「大阪母の会」の名称が登場したのもこれが初めてである。このように、1928(昭和3)年5月発行『児童相談』6巻6号誌上で、翌月の2つの「母の会」についてそれぞれ「甲陽母の会」「大阪母の会」として予告されていた。その後は、2つの「母の会」の名称として「甲陽母の会」「大阪母の会」が定着していったことから、上記の時点で三田谷が2つの「母の会」にそれぞれ名称を付した上、それぞれ別の組織として存立させていくことを判断したと考えられる。

日本児童協会発行『母と子』第10巻2号(1929年2月発行)に、記事「母の会新年会」が掲載された。そこでは、2つの会について次のように説明された。

昭和二年二月、コドモの教養に熱心なる母親達が、当時新設された大阪今橋の治療教育院に参集して、三田谷博士の講話を聞いてから、定期に毎月母の会が開かれて居た。間もなく幹事が出来、会が独立することになった。これが大阪母の会である。

昭和三年春、阪神間芦屋に在り治療教育院の本院が出来たので、芦屋及び其附近の熱心なる母親がここに集まつて素養と教養をつむことになった。間もなくそれも幹事の手で育てられることになり独立して甲陽母の会になった。

斯くて大阪母の会と甲陽母の会とは姉妹の関係となり東西相呼応して母性の修養に努めて来た。

上記記事では、「母の会」が2つに分化する前の「母の会」は、「大阪母の会」の前史として理解されていた。その点は、報告者が『児童相談』記事で確認した内容と一致している。記事によれば、1929(昭和4)年1月19日、2つの会が合同で新年会を催した。大阪毎日新聞社の大集会室にて行われ、「御大典の映画、高石同社主筆の講話、ラムバス女学院教授高森富士子女史指導の社交及び家庭遊戯、大毎社見学」との内容で「参会申込者」は「百五十名以上」であった。各会の幹事として、大阪母の会より久米屋寿子、里見しづ子、新田倭文子、小田八重子、和田たけ子、松浦敏子、甲陽母の会より今井よし子、猿丸せつ子、後藤うめ子が出席した。

『母と子』誌上において、先述した新年会記事を皮切りに「母の会」関係記事が掲載されるようになる。ほぼ毎号に「母の会」と題して各会の動向記事(多くは例会等実施記事)を紹介するページが設けられた。「大阪母の会」の記事は、『母と子』10巻2号(1929年2月)の先述した記事から、24巻2号(1943

年2月)まで計98回確認できた。「甲陽母の会」の記事は、同じく10巻2号の記事から、24巻10号(1943年10月)まで計113回確認できた。構成員の変化まではわからないが、両会は長きにわたり存続したと考えられる。

以上、三田谷が関係した「母の会」のうち、双壁とも呼びうる「大阪母の会」と「甲陽母の会」の存立の背景をとらえた。三田谷が大阪市下と兵庫県武庫郡精道村の2か所に活動拠点を持ったことから、それぞれを拠点とする「母の会」が存立するに至ったとわかった。

三田谷は「治療教育といふたつた四文字の意味がまだ世の中に普及しないことが教育上の悲しむべき事実です。」と述べた上、「私共の直接関係して居る日本母の会の支部が各地にできつゝあることは何と言つても母親の修養上喜ぶべきことで、治療教育の必要な点に注意を惹起して貰ふこともできます。」と述べていた(『児童相談』11巻8号、1933年8月、3頁)。「治療教育」とは、虚弱児・障害児に対して行う療育のことで、その必要について「母の会」を通じて啓蒙できるとの発言であった。

本研究の結論

本研究は、三田谷治療教育院を設立した三田谷啓に着目した。三田谷は、主に関西地方の各地において「母の会」の組織化を促していた。最初に発足したのが「大阪母の会」と「甲陽母の会」で、これらは、三田谷が大阪市と兵庫県武庫郡精道村の2か所に相談事業の拠点を持っていたことと関係していた。「母の会」組織化の目的の一つは、三田谷が手掛ける諸事業の意義を啓蒙することであったとわかった。

(3) 得られた成果の位置づけとインパクト

報告者は、本研究開始時において、三田谷の「障害児のための家庭教育論」を明らかにすることを目的としていた。しかし、研究を進めるうち、そのような目的に直接関係すると思われる論稿が見当たらないことがわかった。あわせて、三田谷が「母の会」の組織化を促していたことや、その「母の会」についての先行研究がほとんどないことがわかり、「母の会」の動向に注目するに至った。

このように、三田谷に關係する「母の会」の動向を明らかにすることで、三田谷の母親教育論に迫ることができるものと考えられるようになり、「母の会」について明らかにすることを目的として作業するようになった。

作業・分析の結果、当時は障害児を家庭で養育するための方法や理念を論じる段階ではなく、障害児は適切な収容施設にて教育を受けべきで、三田谷はそうした選択を親が行うよう啓蒙に尽力していたことがわかった。よって、「母の会」の組織化を通して母親の児童保護事業全般への理解を高めることが、三田谷にとっての「母の会」組織化の目的の一つだったのではないかと考えるに

至った。

三田谷は教育と福祉の分野に関連する事業を展開した人物で、その研究には蓄積がある。本研究は、これまで手がけられてこなかったその「母の会」研究に着手したことで、三田谷の事業を明らかにしていくための一助となったものと考えられる。

ちなみに、「母の会」など親の会の組織化については先行研究の蓄積があるが、児童保護事業との関連で論じる論稿はなかったと考えている(玉井一美「昭和戦前・戦中期の「母の会」の実践 PTA 発足前における親の教育参加」1999年、水崎富美「池袋児童村小学校における教育課程づくりと保護者の参加:「緑会」と「母の会」の活動を中心として」2003年、浅野俊和戦時下保育運動における「両親教育」問題研究 『保育問題研究会』を中心に)2010年、志村前掲『一九三〇年代日本における家庭教育振興の思想 「教育する母親」を問題化した人々』奥村前掲『動員される母親たち 戦時下に於ける家庭教育振興政策』、穴戸健夫『日本における保育園の誕生 子どもたちの貧困に挑んだ人びと』2014年、松田澄子「山形県における女性団体の成立過程について:母の会・母姉会から婦人会・処女会へ」2015年、など。特に親の組織化については、銃後支援・戦争遂行の観点からの論調が目目を引くが、障害児の保護の観点など、多様な視点から検討していく必要がある。その意味でも、本研究は「母の会」など親の組織化に関する研究にも一定のインパクトを与えるものとなったのではない。

今後の展望であるが、三田谷が関係した多くの「母の会」について、各地の事情もふまえた地域史の視点から検討を行い、三田谷の「母の会」研究を深めていきたい。本研究はまさに「挑戦的萌芽研究」として新たな研究分野に先鞭をつけることができ、それも成果の一つとなった。

5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計1件)

志村聡子

「三田谷啓が促した「母の会」の組織化 「大阪母の会」「甲陽母の会」「阪南母の会」に着目して」
幼児教育史学会第13回大会、2017年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

志村 聡子 (SHIMURA, Akiko)
立正大学・社会福祉学部・教授
研究者番号: 50406609

(2) 研究協力者

津曲 裕次 (TSUMAGARI, Yuji)

駒松 仁子 (KOMAMATSU, Hitoko)

坂井 美恵子 (SAKAI, Mieko)

資料提供者

堺 孰 (SAKAI, Minoru)

石割 徹 (ISHIWARI, Tohru)